

フロイトとスピノザ (Ⅲ-3)

河 村 厚

目 次

序	
第一章 フロイトの「隠された」スピノザ書簡	(以上, 64巻1号)
第二章 フロイトのレオナルド・ダ・ヴィンチ論における スピノザについて	(以上, 64巻2号)
第三章 フロイトの『機知』における「我が不信仰の同志 スピノザ」をめぐる	
第一節 『ドイツの宗教と哲学の歴史によせて』(1935年)	
第一節 a キリスト教	
第一節 b ドイツ哲学革命の準備としてのスピノザ	(以上, 65巻5号)
第一節 c 汎神論の社会革命的意義	
第一節 d ドイツの汎神論的思想風土・基盤	
第一節 e ドイツにおける汎神論論争	
第一節 f ドイツ観念論——ドイツの哲学革命と政治革命	(以上, 66巻1号, 本号)

第三章 フロイトの『機知』における「我が不信仰の 同志スピノザ」をめぐる

——ハイネのスピノザ主義とフロイト——

第一節 f ドイツ観念論——ドイツの哲学革命と政治革命 (前号からの続き)

前稿では、「第三章第一節 f ドイツ観念論——ドイツの哲学革命と政治革命」に入り、『ドイツの宗教と哲学の歴史によせて』第三巻を主たるテキストととして、カントとフィヒテの哲学に対するハイネの解釈を見てきた。本稿ではまず、ハイネの同書第三巻の残りで論じられている、シェリングの自然哲学(汎神論)とヘーゲル哲学を主な対象として考察を進める。そこでは通常の哲学史解釈とは異なるハイネ独自のドイツ観念論解釈が浮かび上がるであろう。そしてそのことが、ハイネ自身の「革命性」の思想的根拠を示すことにもなる

だろう。

シェリングの自然哲学（汎神論）

ハイネは、シェリング（Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling 1775-1854）の哲学の解説を始めるにあたり、自分はシェリング自然哲学（Naturphilosophie）についてのいくつかの誤解を解き、その「社会的意味・重要性（die sociale Wichtigkeit）」について注意を喚起したいと述べている（DHA: Bd. 8/1, S. 108 邦訳: 130）。そしてまず、これまで本書（『ドイツの宗教と哲学の歴史によせて』）第三巻で論じてきたフィヒテの哲学とシェリングの哲学の異同について説明している。

フィヒテが先行者カントに対してそうであったように（DHA: Bd. 8/1, S. 91-92 邦訳: 111）、シェリングも哲学的キャリアの最初の頃は、先行者フィヒテとよく似た哲学を主張していた。ハイネはこう述べている。

「シェリング氏と全く同じく、フィヒテもまた、ただ一つの本質（ein Wesen）、すなわち自我（das Ich）、すなわち絶対者（das Absolute）だけが存在すると教えた。彼は理想的なものと現実的なものとの同一を教えた。私が先に示したように、『知識学』の中でフィヒテは、知的構成によって理想的なものから現実的なものを構成しようとした。ところがヨーゼフ・シェリング氏は事柄を逆にしたのである。彼は現実的なものから理想的なものを解釈しようと努めた。」（DHA: Bd. 8/1, S. 109 邦訳: 130）

フィヒテは「事行 Tathandlung」としての絶対自我から全哲学体系を導き出す「知識学」を築いた。シェリングにおいても、主観と客観、自然と精神の絶対的無差別の根拠としての絶対者とその哲学の前提かつ出発点なる。このように前提部分は同じでも、フィヒテとシェリングでは、その方法の順序が逆であるとハイネは指摘しているのである。しかしシェリングは、以下に見るように、哲学におけるこの二つの方向性（先験的観念論と自然哲学）を、最初は、自らの中で並列的に追求した。

「フィヒテは、思想と自然は同一であるという根本命題から出発して、精神の操作によって現象世界に到達する。彼は思想から自然を創造し、理想的なものから現実的なものを創造する。これに反してシェリング氏の場合、同じ根本命題から出発しておきながら、現象世界が全くの理念となり、自然が思想になり、現実的なものが理想的なものになる。したがってこの二つの方向、フィヒテの方向〔先験的観念論〕とシェリング氏の方向〔自然哲学〕はいわば互いに補いつ合っているのである。なぜなら先に述べたあの最高の根本命題によると、哲学は二つの部分に分けうるからである。一つの部分では、理念からいかにして自然が現象するかが示され、もう一つの部分では、いかにして自然が全くの理念へと溶解するかが示されることとなろう。このために哲学は、先験的観念論と自然哲学に分けることができたのだ。さてシェリング氏もこの二つの方向を事実上承認し、後者を『自然哲学に関する考案』[1797年]において、前者を『先験的観念論の体系』[1800年]において追及したのである」(DHA: Bd. 8/1, S. 109 邦訳: 130-131)

確かにシェリングは早熟の天才で、二十代前半で、上に見た(引用の最後の)二つの著作(『自然哲学に関する考案』と『先験的観念論の体系』)を発表した。だがハイネによると、シェリングの場合は、いずれの著作にも(完全な)「体系 System」といったものが存在しないし、哲学の中心点と見ることのできる主著も存在しない(よって彼の著作を年代順に追って思想の漸次的な形成・発展・変化を跡付けることが重要となる)。とってシェリングの詩的傾向性は、趣味的なものに過ぎず、文学の才にも恵まれていなかったと、ハイネは言う。

「彼ら(シェリングのような人々)の感情は詩的だが、その道具、すなわち言葉は弱い。……シェリング氏とフィヒテを区別するまさにこのポエジーは、シェリング氏の強みでありかつ弱みである。……フィヒテは哲学者に過ぎず、その威力は弁証(法)にあり、強みは論証にある。ところがこの点こそシェリング氏の弱い側面であり、彼はむしろ直観(Anschauung)のうちに生き、論理学の冷たい高みはどれも居心地が悪く、しばしば生気を求め、象徴学の花咲く谷間へ降りていきたがるのだ¹⁾。彼の哲学的強みは構成することにある。だ

1) 本書第3巻において既にハイネは、「ドイツの初期ロマン主義者たちは自分でもよくわかっていない或る種の汎神論的本能に基づいて行動した」(DHA: Bd. 8/1, S. 109 邦訳: 130-131)

がこれは、最良の哲学者と、そして凡庸な詩人にしばしば見られる精神能力なのである」(DHA: Bd. 8/1, S. 110 邦訳: 131)

ハイネは、このように哲学的論証に弱いシェリングの本領はむしろ(中途半端に詩的な)ただ自然哲学であると考えている。「シェリング氏は先験的観念論でしかない哲学の部分では、どこまでもフィヒテの受け売りでしかなく、そうしないわけにはいかなかった。だが花や星の中に混じって仕事をしなければならぬ自然哲学では、彼は実に強力に光り輝かずにはいなかった」(DHA: Bd. 8/1, S. 邦訳: 131-132)。だがシェリングの本領たるこの自然哲学ですら、「実のところ決して自前のものではなく」、「その理念はつまるところ「スピノザの汎神論に他ならない」のである²⁾ (DHA: Bd. 8/1, S. 111 邦訳: 132)。このことを、ハイネは近代哲学史の文脈の中に位置づけて以下のように表現している。

「スピノザの学説と、シェリング氏がまだまとまな時期に樹立した類の自然哲学とは、本質的には同一のものである。ドイツ人はロックの唯物論を斥け、ライプニッツの観念論を〔カントからフィヒテへと〕とことんまで推し進め、これもやはり不毛だと見て取った後、ついにデカルトの第三子スピノザに辿り着

↘8/1, S. 101 邦訳: 121) と述べていたが、『ロマン派』第1巻においては、シェリングの自然哲学は「ロマン派に多大な個人的影響を与えていた」(DHA: Bd. 8/1, S. 邦訳: 181) とし、同書第2巻第4章においては、シェリングの自然哲学(汎神論)がロマン派に与えた影響について、「シェリングによって自然哲学が活性化されて以来、自然は詩人たちによって以前より一層意味深く捉えられるようになった」と述べ、その代表としてノヴァーリス(1772-1801)を挙げている(DHA: Bd. 8/1, S. 邦訳: 245)。

2) 「たとえシェリング氏が躍起になってこの〔ドイツの同一哲学はその本質において全くスピノザの学説と異なることがないという〕考えに反対し、自分の哲学はスピノザ主義とは異なるもので、むしろ「理想的なもの」と現実的なものとの生き生きした浸透」であって「完成したギリシアの立像が硬直したエジプトの原物とは」違うように、スピノザ主義と違ったものだ、と主張しようとも、それでも私は、シェリング氏がまだ哲学者だったその初期においては少しもスピノザと違うところがなかった、と断言しておかなければならない……別の道を通って同じ哲学に到達しただけのことである」(DHA: Bd. 8/1, S. 57 邦訳: 69)。

いた³⁾。哲学はまたも一つの大きな循環運動を完了したわけだが……」(DHA: Bd. 8/1, S. 111 邦訳: 132)。

ハイネによると、シェリングは、「カントが〔単に思いやりの気持ちから〕残しておいた神の存在証明、いわゆる道徳的証明」(本稿Ⅲ-2, 第三章第一節 f を参照) を覆してしまった。というのもシェリングの神は「スピノザのあの神即世界即万象」であったからだ。ただ、年代順に思想の漸次的な形成を遂げていくシェリング哲学が常にスピノザ的汎神論をとったわけではなかった。あくまでそれはシェリングが「まだまともな時期」のことに過ぎない。ハイネはそれを具体的に、「少なくとも1801年には、『思弁的自然学雑誌』の第二巻〔『私の哲学体系の叙述』〕ではそうだった⁴⁾」としている (DHA: Bd. 8/1, S. 111

3) 「シェリング氏が再びフィヒテの跡を追って歩み続け、かくして自然哲学の森の暗闇の中を彷徨いながら、ついにスピノザの偉大な立像と面と向かい合って立つようになる」(DHA: Bd. 8/1, S. 57 邦訳: 69)。

4) 確かにこの『私の哲学体系の叙述』(1801年)の序文では、シェリング自らが、内容と(叙述)形式においてスピノザ『エチカ』に範を取っていることを告白している (SW/IV, XII-XIII 邦訳: 17)。しかし本当のところ、シェリング自身は、スピノザ哲学のことを、特に自己の哲学との関係において、どのように考えていたのだろうか。本音がより顕わになる書簡を二つ取りあげてこの問題を考察する。

この『叙述』に遡ること六年前、まだ二十歳になったばかりのシェリングの「僕はスピノザ主義者になりました」という言葉で哲学史上有名なヘーゲル宛書簡では(1795年2月4日付ヘーゲル宛書簡)、「スピノザにとっては世界(主観に対する客観そのもの)が全てでした。しかし、僕にとっては自我が全てです」と、スピノザと自らとの相違を認めつつも、「絶対的な客観もしくは非我から出発する」方法をとる教条哲学のうち「最高に首尾一貫した教条哲学はスピノザの体系に行き着きます」として、シェリングはスピノザを高く評価している(高山: 1996, 61-62)。方法に違いは認めるが、それでもスピノザのような首尾一貫した体系に魅力を感じ、自分もスピノザのような哲学体系を築きたいと言う意味で「僕はスピノザ主義者になりました」とヘーゲルに書き伝えたのだと考えられる。この書簡からは、シェリングが極めて若い時から、スピノザを高く評価しつつも、自己の哲学との差異を明確に意識していたということが理解できよう。

『叙述』の1年後の1802年に書かれたシェリングのフィヒテ宛書簡からは、シェリングの(スピノザ哲学に対する)より繊細な態度と本音が垣間見れる。ことの成り行きは、まずフィヒテがシェリングに以下のような内容の書簡を送ることに始まる(1802年1月15日付けのシェリング宛書簡)。それは「一者は一切であり、そゝ

の逆でもある」というスピノザの（汎神論的）立場では「どのようにして、一者が一切に、そして一切が一者に成るのか——スピノザは両者の移行点や転換点や実在的な同一性点を我々に挙げるができませんし……彼は存在と思惟という絶対的なものの2つの根本形態さえも、まさにそれ以上証明することもなく立てているのです。それは貴方（シェリング）がまさに行っていることでありますが（私＝フィヒテ）知識学では決して正当化されないことなのです」（傍点はフィヒテ）という、スピノザの「実体論（汎神論）の立場とシェリングの同一哲学の内容を重ねたうえでの批判であった。しかしこの書簡の最後でフィヒテは、「貴方（シェリング）との衝突を避けるため」に、次回作では「貴方では決してなく、専らスピノザを私の論敵にしよう」と計画しています」という何とも皮肉たっぷりの言葉を書いている（シュルツ編『フィヒテ—シェリング往復書簡』邦訳184-185）。

フィヒテのこの書簡の最後の言葉に対して、シェリングはその返事（1802年1月25日付けフィヒテ宛書簡）の中で、次回作でフィヒテが（自分ではなく）スピノザを「仮想論敵」にするのは「真っ直ぐな仕方ではない」としたうえで、もし真っ直ぐな仕方が採られたら、「貴方（フィヒテ）は、スピノザのうちに含まれているものよりもっと沢山のことを論駁する」ことになり、そうなれば「私は、〔フィヒテの次回作での「批判」の中から〕スピノザに属するものと私に属するものとを峻別するという仕事と、それ以外に必要なことをするという仕事の、二重の仕事〔反論〕を持つことになるわけです。といいますのも、彼（スピノザ）が私（シェリング）の名前のもとで曲解されることも、私が彼の名前のもとで誤解されることも、私は決して許そうとは思いませんから」（シュルツ編『フィヒテ—シェリング往復書簡』邦訳188、下線は河村による）と述べている。

シェリングのこの返事からは、1802年の時点で、スピノザ哲学を尊重しているがゆえに、それが曲解されることを危惧しつつも、自分の哲学は決して「スピノザ主義」には回収できない独自のものであるという強い自負を持っているシェリングが浮かび上がってくる。これは七年前のヘーゲル宛書簡とも共通していることだと言えよう。

そしてシェリングのこのようなスピノザ哲学への二重の態度は、彼の（書簡ではなく）著作の中では後者の態度（スピノザとの相違を強調することによって自己の哲学の独自性を守る態度）の方がより強く出る傾向にあったのかもしれない。既に1797年の『自然哲学に関する考案』「序説」において、シェリングは「スピノザ説においては無限者から有限者へのいかなる移行もありえなかった」（SW/II, 36 邦訳：46）という批判をしているし、1809年の『人間的自由の本質』では、スピノザの体系の「論証は、自由と相容れず、完全に決定論的であり、決して汎神論的ではない」（SW/VII, 349 邦訳：94）として、本来、自由の体系でなければならない「汎神論」が、スピノザ主義のおかげで誤解に晒されてきたと極めて厳しく批判している。更には、同箇所、生命なき、機械論的なスピノザの体系、自然観の中に、「愛の暖かい息吹によって魂を与えられなければならなかったピグマリオンの像と同じ硬さを見ることができるとも批判する（河村：2013, 343）。➤

邦訳：133)。

『私の哲学体系の叙述』⁵⁾では神 (Gott) は、自然と思考との、物質と精神との絶対的同一であり、この絶対的同一は世界即万象 (Welt-All) の原因ではなく、世界即万象そのものであり、ゆえにそれは〔スピノザと同じ〕神即世界即万象 (Gott-Welt-All) なのである。この内にはいかなる対立も分割も存在しない。絶対的同一は絶対的総体でもある」(DHA: Bd. 8/1, S. 111 邦訳：133)。

シェリングはこの『私の哲学体系の叙述』の一年後に『ブルーノ、別名、事物の神的あるいは自然的原理について』(1802年)を発表し、自分の神をさらに発展させ、そして1804年の『哲学と宗教』において、その神をついに完成させた。ハイネによると、この『哲学と宗教』の中には、「絶対的なものの学説」が完璧な形で見出される。そこでは「絶対的なもの」(絶対者)が三つの公式(形式)で表現されている⁶⁾(DHA: Bd. 8/1, S. 112 邦訳：133-134)。ハイネはこの三つの公式をほぼ忠実に書き写して以下のような検討を加えている。

- 第一の「定言的 die Kategorische」公式：「絶対的なものは理想的なものでも現実的なものでもない(精神でも物質でもない)、そうではなく、両者の同一性である⇒全く否定的。

ㄨ 平尾昌宏によると、「特に『自由論』[『人間的自由の本質』のこと]以降の思索を重視し、シェリングは生涯一貫してスピノザを批判し続けており、根底から覆すことを意図していたのだ」と主張する論者さえいる(平尾：2004, 39)。しかし平尾は、このように「シェリングに一貫したスピノザ批判を見る理解」も、その逆に「一貫したスピノザ主義を見る試み」も共に不十分なものとして退ける。この二人の哲学者の比較研究に際して大事なものは「シェリングによって隠蔽されたスピノザ哲学についての研究」であり、「スピノザをシェリングの「スピノザ主義」から解放することと、シェリングをスピノザから解放すること」の両方が必要なのである(平尾：2004, 40-41)。

5) この本でシェリングは自然哲学と先験的観念論という二つの体系の並列を止め、絶対的同一性を体系原理とする「同一哲学」を成立させた、と言われている(中岡・宗像編『西洋哲学史』192)

6) ハイネが以下で紹介しているシェリングの「絶対的なもの(絶対者)の三つの公式」は『哲学と宗教』本論冒頭のシェリングの説明を指し示していると考えられる(SW/VI, 23-25 邦訳：16-18)。

- 第二の「仮言的 die hypothetische」公式：もし主観と客観とが現存するならば、その場合、「絶対的なもの」は両者の本質的同等性である⇒〔肯定的だが〕一つの条件を前提しており、この条件は、条件づけられているものそれ自体より把握するのがずっと困難。
- 第三の「選言的 die disjunktive」公式：ただ一つの存在しか無いが、しかしこの一つの存在は同時に、あるいは交互に、全く理想的（観念的）とも、あるいは全く現実的（実在的）とも見なすことができる⇒全くスピノザの公式と同じものであり、絶対的な実体は、思惟として認識しうるか、もしくは延長として認識しうるというもの。

ハイネは第三の「選言的」公式＝スピノザの実体・属性論を重視して、「それゆえシェリング氏は、哲学の道ではスピノザより先へ進むことができなかった。この二つの属性、思惟と延長の形式のもとでしか絶対的なものは把握されえないからである」と述べている（DHA: Bd. 8/1, S. 112 邦訳：134）。実際、シェリング自身も『哲学と宗教』の当該個所で、第三の「選言的」公式（形式）を先行する二つの公式の「結合」から生じるものであり、「絶対的なもの（絶対者）を表現する形式」としては「哲学において最も有力な形式」である⁷⁾としたうえで、これは「とりわけスピノザを通じて知られるようになったものである」と主張しているのである（SW/VI, 24-25 邦訳：18）。

ハイネは、『哲学と宗教』におけるシェリングの存在論＝自然哲学を、自らの立場であるスピノザ主義と同じものとして評価していた。しかし、この著作における「絶対的なもの」についてのシェリングの認識論に対しては厳しく批判している。

7) ただしシェリングは、この第三の公式（形式）も含めた「絶対者を表現するあらゆる可能的形式は、やはり〔直観ではなく〕反省における絶対者の現象形式に過ぎない……けれども、観念的でありつつ直ちに実在的であるもの本質そのものはもろもろの説明によってではなく、ただ直観によってしか認識されえない。と言うのも、合成されたものだけが記述を通じて認識可能であるが、単純なものは直観されようとするからである」（SW/VI, 25-26 邦訳：19、傍点はシェリングによる強調）と述べて、「反省」による「絶対者を表現するあらゆる可能的形式」の不十分さを批判している。

「しかしシェリング氏は今では哲学の道を捨て、一種の神秘的直観 (mystischer Intuition) により絶対的なものそれ自体の直観 (Anschauung des Absoluten selbst) に到達しようと努めている。彼は絶対的なものをその中心点において、その本質性において直観しよう (anzuschauen) と努めるが、ここでは絶対的なものは理想的 (観念的) なものでも現実的 (実在的) なものでもない、思惟でもなく延長でもない、主観でもなく客観でもない、精神でもなく物質でもない⁸⁾、そうではなくて……、一体何だというのだろうか。ここにおいてシェリング氏の場合、哲学が終わり、そして文学 (Poesie)、私に言わせれば、道化 (Narrheit) が始まるわけである。……シェリング氏の哲学的経歴は、絶対的なものを知的に直観する試み (Versuch, das Absolute intellektuell anzuschauen) をもって終わったと私は思っている」(DHA: Bd. 8/1, S. 112-113 邦訳: 134)。

ハイネはこのように、シェリングの直観理論を批判しているわけであるが、二つの疑問が残る (以下①, ②)。

① まず第一に、存在論においてシェリングと同じく汎神論 (と絶対的同一性の哲学) を取る——ここまではハイネは高く評価するのだ——スピノザは、認識論ではシェリングと同じ直観理論をとるのに、スピノザのそれについてはこの箇所では問題にされても、批判されてもいないということである。この点ゲーテが、スピノザから汎神論的自然観とその実相を認識するための「直観知」を共に吸収していたのとは対照的である (次稿「フロイトとスピノザⅢ-3」の補論「ゲーテのスピノザ観——『詩と真実』第14章と第16章を中心に——」を参照)。

先に掲げたようにハイネは、「それゆえシェリング氏は、哲学の道ではスピ

8) ハイネがここで、問題にしているのは、『哲学と宗教』本論冒頭の以下の箇所と思われる。「我々にとっては主観的なものも、また客観的なものも存在せず、絶対者 (絶対的なもの) は我々にはただかの対立の否定という意味で両者の絶対的同一なのであると…… [絶対者そのものの認識の為の] 知的直観は、むしろ魂そのもの自体をなすところの認識であって、それが直観と呼ばれる理由も、ただ魂の本質が絶対者と一つであり、絶対者そのものであって、このものに対して、直接的な関係しか持ちえないという点に在る」(SW/VI, 22-23 邦訳: 15-16, 傍点はシェリングによる強調)。

ノザより先へ進むことができなかった。この二つの属性、思惟と延長の形式のもとでしか絶対的なものは把握されえないからである」(DHA: Bd. 8/1, S. 112 邦訳: 134)と述べていた。ではこの場合の「把握する *begreifen*」とは、認識論的には具体的にどのような種類の認識を指しているのだろうか？ それはシェリングの場合は「知的直観」であり、スピノザの場合は「直観知 *scientia intuitiva*」のことであろう。そして今問題にしている『哲学と宗教』の当該個所で、シェリングは、自らの「知的直観」論を主張する際に、スピノザ『エチカ』の直観知を引き合いに出してもいる。そこにおいてシェリングは、「ただ直接的な直観的認識だけがいかなる概念による規定をも無限に凌駕する」(SW/VI, 23 邦訳: 16, 傍点はシェリングによる強調)と述べる一方、『エチカ』第5部定理30を引用して、スピノザのこの定理を独断論だと誤解する人は、「絶対者の唯一可能な直接的認識〔直観知〕のこと」をそっちのけにしてしまっていると述べているのだ(SW/VI, 24 邦訳: 17)。ここでは詳述しないが、シェリングの「知的直観」は、スピノザの「直観知」から影響を受けていることは間違いないと考えられる⁹⁾。

そして、実はハイネは、本書(『ドイツの宗教と哲学の歴史によせて』)第二巻でスピノザの神=実体—属性論¹⁰⁾について論じた際に、「神の本質についての我々の説明においては、あの二つの認識しうる属性〔思惟と延長〕だけを引き合いに出すことにしよう。その場合でも、我々が神の属性と呼んでいるもの全ては、結局のところ我々の直観のそれぞれ異なった形式 (*eine verschiedene Form unserer Anschauung*) に過ぎず、異なったこの諸形式は、絶対的な実体の中では同一である」(DHA: Bd. 8/1, S. 57 邦訳: 69)。傍点による強調は

9) 長島隆は自然哲学完成以前の最初期のシェリングにあっても、その知的直観はスピノザに依拠していたと主張する(長島: 2004)。

10) 本書で哲学史を「社会的な意味、重要性」の観点から考察しているハイネは、神=実体には無限数の属性があり、そのうち人間に認識しうるのは「思惟」と「延長」という二つの属性に過ぎないというスピノザの説を説明しつつも、「精神において認識されるものを物質に現象させることこそ肝要である〔ハイネ自身の〕社会的な立場」から見たら、我々に認識できないその他の属性は何の価値もないと述べていた(DHA: Bd. 8/1, S. 57 邦訳: 69)。

河村による) というように、スピノザの「直観知」をほのめかすような記述をしていた¹¹⁾。そして更にはこの引用に続く箇所ではハイネは、「〔スピノザの神＝実体—属性論においては、〕思想は結局のところ目に見えない延長に過ぎず、延長は目に見える思想に過ぎない。ここで我々は、ドイツの〔シェリングの〕同一哲学の主要命題に行き着くことになる。この哲学は、本質において全くスピノザの学説と異なるところがないのである」(DHA: Bd. 8/1, S. 57 邦訳: 69)、と述べている。

以上を考え合わせると、結局、存在論においても(同一哲学と汎神論)、認識論においても(直観理論)、スピノザとシェリングは共通している¹²⁾と、ハイネは理解していたはずであるが、認識論の部分ではなぜかシェリングだけが批判されているのである。

この第一の問題に関しては、ハイネは似たような恣意的解釈を他にもしてい

11) また同じく本書第二部のスピノザを論じた個所でハイネは、「近代自然哲学はただ一つの手柄を立てた。つまり両端にある精神と物質との間に存在する永遠の並行関係を、極めて鋭く証明したのである。私はここで「精神と物質」という言葉を用いた。この二つの言葉をスピノザのいわゆる「思惟と延長」と全く同じ意味で用いたのである。この「精神と物質」はわれわれドイツの自然哲学者のいわゆる「精神と自然」、あるいは「理想と現実」ともいわば同義語であろう。そういうわけだから私は汎神論という語を用いるが、この名でスピノザの体系(System)というよりもむしろその直観の仕方(die Anschauungsweise)を呼ぶことにする」(DHA: Bd. 8/1, S. 57 邦訳: 69-70) というように、ドイツの自然哲学者(シェリング)とスピノザの存在論的一致と、スピノザ哲学の体系を支えている認識(能力)が「直観(知)」であることをについて述べている。

12) 上に見たように、スピノザの「直観」について述べる時にいつもハイネはスピノザが用いたラテン語“Intuitio”のドイツ語訳としての“Intuition”ではなく、“Anschauung”の方を用いている。しかし、スピノザの「直観知 scientia intuitiva」のドイツ語訳は例えば代表的な『エチカ』独訳である PHB 版では“das anschauende Wissen”となっているし(S. 90)——もちろんレクラム文庫の羅独対訳『エチカ』のように“das intuitive Wissen”と訳する場合もあるが(S. 209)——、そもそもドイツ観念論において「直観」は“Intuition”よりも“Anschauung”で表わされることが多く、ここでハイネが問題にして(批判して)いるシェリングの場合も、その「知的直観 die intellektuelle Anschauung」に“Anschauung”が用いられていることを考えると、スピノザのラテン語“Intuitio”に対して、ハイネが“Anschauung”というドイツ語を当てたととしても、不自然ではない。

る。それは、スピノザの汎神論から影響を受けたゲーテの汎神論を高く評価しつつも（本稿Ⅲ-1頁、Ⅲ-2頁参照）、同じくスピノザから「直観知」についても、ゲーテが大きな影響を受けていること¹³⁾については俎上に載せていない（当時まだ書簡集が刊行されていなかったためか？）という点、シェリングと同じくフィヒテも「知的直観 *intellektuelle Anschauung*」を用い、「知的直観はあらゆるの哲学にとっての唯一確かな立脚点である」（『知識学への第二序論』（1798年））とまで主張しているのに（GA 1/4, 219 邦訳：414）、これも俎上に載せていなかった点である。

② 第二は、ヘーゲルによる（シェリングの）直観理論批判にハイネが触れていないということである。例えば『精神現象学』（1807年）の「序論」においてヘーゲルはこう述べる。

「このような学一般の、つまり知の生成（Werden）こそ、精神現象学が述べるものである。初めに在る通りの知、つまり無媒介（直接的）な精神（*der unmittelbare Geist*）は、精神のないもの、感覚的意識である。本来の知に成るためには、言い換えれば、学の純粋な概念そのものであるような、学の間を生み出すためには、知は永い道程を通り抜けなければならない。生成は、自らの内容とこの内容の内に現れる形態とにおいて、整えられるである。が、この生成は、差し当たり、学的でない意識を学に導くことと考えられるかもしれないけれども、そういうものではない。そうかといって、学の基礎付けとも違ったものである。まして、ピストルからでも発射されるように、いきなり絶対知で始め（mit dem absoluten Wissen unmittelbar anfängt）、他の諸々の立場には全く目もくれないと言明して、そういう立場を既に片づけてしまっているとするような靈感、などではない」（Hegel: 1807, S. 31 邦訳28）

この引用箇所は哲学史上よく知られた、ヘーゲルのシェリング直観理論に対する批判——この批判によってヘーゲルとシェリングの盟友関係は終焉を迎えることになる——のフレーズである。ここでは「直観」という言葉は用いられ

13) ゲーテがスピノザの直観知から影響を受けていることについては、次稿「フロイトとスピノザⅢ-3」の補論「ゲーテのスピノザ観——『詩と真実』第14章と第16章を中心に——」を参照。

てはいないが、この『精神現象学』序論の他の箇所¹⁴⁾ヘーゲルが、「〔シェリングの場合は〕絶対者は概念把握されるのではなく、感じられ直観されることになる」(Das Absolute soll nicht begriffen, sondern gefühlt und angeschaut [werden]) (Hegel: 1807, S. 15 邦訳17-18下線は河村)という批判や、「〔シェリングのように〕思惟が実体の存在と一つになり、直接態すなわち直観 (Anschauen) をそのまま思惟 (Denken) と考えるならば、その場合にもなお、このような知的直観 (dieses intellektuelle Anschauen) は再び惰性的な単純性に落ち込み、現実そのものは非現実的な仕方で表現されることになりはしないか」(Hegel: 1807, S. 23 邦訳23下線は河村)という批判をしていることから、ヘーゲルがシェリングの「知的直観」論をここでも攻撃しているのは明らかであろう。

後述するように、ヘーゲルに強い関心を抱き、講義に参加したり、個人的な交流を持ち、またヘーゲル哲学についての著作を執筆する計画まで立てていたハイネが、このシェリング直観理論批判を含んだ、余りに有名な『精神現象学』序論を読んでなかったということは考えにくい。一つの解釈として、ハイネがヘーゲルとシェリングとの同一性 (自然哲学者としての) を強調しすぎるあまり、認識論的な差異は無視してしまったと考えるのも可能である。

『精神現象学』(1807年)でヘーゲルに批判された二年後に刊行された『人間の自由の本質』(1809年)で、シェリングは同一哲学の汎神論的思想から人格神論の要素を取り入れた「汎神論」にまず移行していく¹⁵⁾(SW/VII, 347-350, 394-395, 403-406 邦訳: 91-96, 154-156, 166-169)。そして——本人の意思に反

14) 『精神現象学』(1807年)序論でヘーゲルは、シェリングの名を直接挙げることなく、何度もシェリング哲学を厳しく批判している。その批判は上に本文で見たように、シェリングが知的直観によって絶対者を直接的に認識できると主張したことへの批判が主であるが、シェリング同一哲学では、一切の差異 (区別) が絶対者の中に解消されてしまうという——ヘーゲル自身のスピノザ汎神論批判を彷彿させるような——批判も見られる (Hegel: 1807, S. 22 邦訳22)。

15) シェリング研究者の松山寿一によれば、「擬人神論たることを承知のうえで、『自由論』以降、初期におけるスピノザ主義の立場をかなぐり捨てて、シェリングがそれとは対極の人格神の立場に立つことになったのは」、「情にかけ」、「干からびて

しての出版であるとはいえ——最後の著作となった『ついに顕となった啓示の積極哲学』（1834年）においては、シェリングは、創造論と救済論によって世界における「切断」を知っているキリスト教のみが、「世界の真の時間性と世界の生き生きとしたありかたを教えることができる」として、キリスト教に回帰した人格神論としての「積極哲学 positive Philosophie」を説くに至る（村岡：2012, 144）。

「かつて最も大胆にドイツで汎神論の宗教を表明した男、自然を聖化し、人間にその神権を取り戻すことを最も声を大きくして告知した男〔シェリング〕、この男が自分自身の学説に背いたのである。彼は自分で聖別した祭壇を見捨て、過去の信仰の厩にこそこそ引き返した。そして今では立派なカトリック教徒になって、『世界を創造する愚行を犯した』世界の外にある人格神を説教しているのだ。……それは、人間が疲れて年を取れば、人間が身体的および精神的力を失くせば、人間がもはや楽しんだり考えたりできなくなれば、カトリシズムに傾いていくことを証明している¹⁶⁾に過ぎない」（DHA: Bd. 8/1, S. 113-114 邦訳：135-136）

しかし、晩年に人格神信仰に改宗したのはシェリングだけではなかったと、ハイネは言う。若く元気で「自らの理性を十分に支配している」時は、びくともしなかった「自由思想家」たちの多くが、臨終の床にあって（カトリシズム的人格神信仰に）改宗したのである。シェリングの「改宗」は、「創造の仕事が完成したら、創造者は死ぬ。——さもなければ変節する（wenn das Werk der Iniziation vollbracht ist, stirbt der Iniziator—oder er wird abtrünnig）……死の腕に抱かれるか、さもなくばかつての敵の腕に抱かれる」（DHA: Bd. 8/1, S. 114 邦訳：136）という「自然法則」に従ったまでのことである。そして死の四年前に、「自分の神を見失った者はこの本〔聖書〕の中に再び神を見出

↘乾いた」と彼自身が批判するスピノザ主義（汎神論）とは違い、「それが「人類の心根（das Urgefühl）」に訴えるものであったためである」（松山：2007, 13-14）。

16) ハイネは、その『ロマン派』第2巻第1章において、フレードリッヒ・シュレーゲルをこのようなカトリックへの改宗の一例として挙げている（DHA: Bd. 8/1, S. 116 邦訳：214-215）。

す」(DHA : Bd. 8/1, S. 499 邦訳 : 18) と告白したハイネその人も、この法則を免れることはできなかったのである。

ハイネは、その『ロマン派』第2巻第3章においては、ヘーゲルによって、哲学の中心舞台から引きずり降ろされたシェリングが「自分を排除したヘーゲルへの妬みと〔アイデア泥棒という〕悪口」を繰り返す、惨めで哀れな男になり下がっているのを直接目撃したと告白している (DHA : Bd. 8/1, S. 187 邦訳 : 239)。

「妬みとやっかみが天使を墮落させた。ということで、ヘーゲルの益々高まりゆく名声への不快の念が、哀れなシェリング氏を、現在の彼が落ち込んでいる所、つまり……カトリック・プロパガンダの罠の中へ導いてゆく。……シェリング氏は哲学をカトリックに売り渡したのである。……シェリング氏は今や、自らの精神の力を振り絞ってカトリック教を正当化すべく奉仕せねばならないのである。彼が哲学の名で現在教えているもの全てが、カトリック教正当化の根拠以外の何物でもないのだ」(DHA : Bd. 8/1, S. 187-118 邦訳 : 240)。

ここでは、このように哲学者として落ちぶれてしまったことが、シェリングをカトリックへの「改宗」に向かわせたと述べられているかのようである。しかし既に見たように、ハイネは、「絶対的なものを知的に直観する試み」を始めた時に、シェリングは本質的には哲学者ではなくなっていたと考えていたわけであるから、表面的には、ここに見られるように、哲学者としての社会的評価をヘーゲルに奪われて、「ヘーゲルへの妬みとやっかみ」を原因としてカトリックへの「改宗」が行われたとしても、この「改宗」の本質は、やはり「創造の仕事が完成したら、創造者は……死の腕に抱かれるか、さもなくばかつての敵の腕に抱かれる」(DHA : Bd. 8/1, S. 114 邦訳 : 136) という「自然法則」にシェリングが抗しきれなかったというまでのことだと言える。

シェリングからヘーゲルへの移行

「昔のシェリング氏はカントやフィヒテと全く同じように、我々〔ドイツ〕の哲学革命 (unsere philosophische Revolution) の偉大な段階の一つを代表している。このドイツの哲学革命の各段階を私は本書でフランス革命のそれと比較

しておいた。実際その通りで、カントを暴力的国民公会 (die terroristische Convenzion) と見做し、フィヒテをナポレオン帝国 (das napoleonische Keiserreich) と見做すならば、シェリング氏はナポレオン帝国に続く王政復古の反動 (die restaurirende Reakzion) と見做すべきだろう。けれどもこれは、最初は〔フランスの王政復古よりも〕より良い意味での復古であった。シェリング氏は自然に、再び元の正当な権利を与えた。精神と自然とを和解させようとし、両者をまた永遠の宇宙霊 (世界靈魂 Weltseele)¹⁷⁾ の中に統一させようとした。シェリング氏はあの偉大な自然哲学を復古させた。その自然哲学はドイツ人の古来の汎神論的宗教¹⁸⁾ から密かに芽生えて、パラケルススの時代に、極めて美しく咲きかけたが、その後にドイツに持ち込まれたデカルト哲学に蕾のままに押し潰されたものであった。ああしかしシェリングは最後になり、悪い意味でもフランスの王政復古と比較されるようなもの〔人格神?〕を復古させたのである〕(DHA: Bd. 8/1, S. 115 邦訳: 137)。

このように、シェリングは自ら為した負の「復古」によって、「思想の王座から突き落とされた」(DHA: Bd. 8/1, S. 115 邦訳: 137)。だがハイネによると、そもそも、「絶対的なものを知的に直観する試み」でもってシェリング哲学は本質的には終わっていたのであった。

こうして、カント、フィヒテ、シェリングへと発展してきたドイツ観念論は、その最終到達地点としてのヘーゲルを迎えることになる。

「今やもっと偉大な思想家が登場する。彼は自然哲学 (Naturphilosophie) を完全な体系に作り上げ、この自然哲学の総合から現象世界全体を説明し、先人たちの偉大な理念をもっと偉大な理念によって捕捉し、これをあらゆる分野に貫徹させる、つまり学問的に基礎づけるのである¹⁹⁾。彼はシェリング氏の弟

17) シェリングのその第二著作『宇宙霊 (世界靈魂) について』(Von der Weltseele, 1798年)においては、「無機的自然と有機的自然とを統合する「共通の原理」が〔宇宙霊という〕一つの理念に求められ」(松山: 2008, 486)、自然全体は一つの「普遍的有機体」として考えられている (SW/II, 350, 569 邦訳: 76, 149)。

18) 古代ゲルマンの汎神論をハイネが高く評価し、当時のドイツに残っているこの伝統に革命的意義を見出ししていることについては、本稿第三章第一節 a, c, d を参照。

19) ここに引用したハイネのヘーゲル解釈には相当の無理が在る。確かに、ヘーゲル

子であるが、しかしこの弟子は、哲学の王国で師匠のあらゆる権力を次第に手中に収め、支配欲に燃えて師匠までも凌駕し、ついには師匠を闇の中に追い払ってしまった²⁰⁾。これこそ偉大なヘーゲルであり、ライプニッツ以来ドイツが生んだ最大の哲学者である」(DHA: Bd. 8/1, S. 113 邦訳: 134-135)。

▼ルの『エンチクロペディー』(第三版1830年)の第2部は「自然哲学」(三部構成で第一部「論理学」、第三部「精神哲学」)であるが、ヘーゲルにとってそれはあくまで学問の全体系(エンチクロペディー)の一部に過ぎない。また、確かにヘーゲルは自然を様々な段階を有したシステム(体系)から成る、「一つの生命を有した全体」として捉えており、この各段階は前段階から弁証法的に「必然的に」産まれるとしているが、それはあくまで理念(精神)による規定であり、理念を離れた自然そのものは、有機的連関も統一性も持たないし、自然自体には現実的な発生と進化の力はないとされた(河村: 2006, 66)。

「有機的自然に歴史はない」(『精神現象学』の章)として、発展を精神にのみ認めるヘーゲルは、自然と精神の同一性に立脚したシェリングの自然哲学とは逆に、「自然と精神のあいだに断絶を設定しつつ自然哲学の体系を打ち立てようとした」と言える。真の意味での概念の自己生成すなわち発展は、自己の内に自己の本質を持つ精神においてのみ認められるのであって、自己の外に自己の本質を持つ自然においてはけっして認められない。ヘーゲルはこのことを、「精神の威力」に対して「自然の無力」と呼んだ(松山: 2008, 493-494)。

要するに、ヘーゲルの「自然哲学」は、厳密に言えば、ハイネが主張するよりもより狭い特定の学問領域を指しており、ハイネが言う「自然哲学の総合から現象世界全体を説明し、先人たちの偉大な理念をもっと偉大な理念によって捕捉し、これをあらゆる分野に貫徹させる、つまり学問的に基礎づける」ようなものでは、決してないし、人間精神が関係する領域(哲学、芸術、宗教、政治、歴史など)をも包括的にカバーするヘーゲル哲学を——いかにその意味をハイネが独自に拡張しようとも——「自然哲学」の名で呼ぶことは無理が在るのである。

- 20) 『ロマン派』第2巻第3章においてハイネは、フィヒテの観念哲学は「フランス唯物論に対する宣戦布告」、つまり物質の側から加えられた侮辱に対する、精神の側からの「復讐」であったが、この両者は長続きせず、物質=自然は「精神の中だけでなく、現実の中にも存在しており、我々の事物に対する直観(Anschauung)は、事物そのものと一致する」というシェリングの「同一学説[同一哲学]」(自然哲学)が、「フィヒテの観念論に抗議する大胆なプロテスタント」として現れたとしている。こうしてシェリングは十九世紀の初めにドイツの精神界に一大革命をもたらした「一人の偉大な人物」となったのだが、次にヘーゲルが哲学の舞台に登場し「思想界の王者」となった時、このシェリングも外様に格下げされ忘れ去られてしまった(DHA: Bd. 1, S. 186-187 邦訳: 238-239)。ハイネのこのような近代ドイツ哲学史の把握と説明の仕方は、明らかにヘーゲル弁証法の影響を受けたものであろう。

この引用の最後の箇所からも明白なように、ハイネはここでヘーゲルを高く評価している。ヘーゲルは、「カントの鋭さとフィヒテの力強さ」を有し、この両者には見られない「思想の調和」（構成的な心の安らぎ）を持っており、両者よりも遥かに優れていると、ハイネは評価している（DHA: Bd. 8/1, S. 113 邦訳: 135）。

カントとフィヒテが「革命的精神」に満ちていたとしたならば、ヘーゲルは、そしてシェリングは保守的に²¹⁾ 見えてしまうかもしれない。しかしハイネによると、この点に関してはヘーゲルとシェリングでは大きな違いがある。それは、ヘーゲルも「シェリング氏と同様、既存の国家²²⁾ と教会を若干正当化し危惧の念を強く抱かせたが、それはしかし、少なくとも理論において進歩の理念を信奉する〔プロイセン〕国家のために²³⁾ なされ、自由な研究の原理を自

21) 「理性的であるものこそ現実的であり、現実的であるものこそ理性的である。

Was vernünftig ist, das ist wirklich; und was wirklich ist, das ist vernünftig.」(Hegel: 1821, S. 24 邦訳169) という『法の哲学』序文の言葉は－ヘーゲルのこの言葉の真意を誤解したうえでのことではあっても－ヘーゲルの保守性を表わす言葉としてよく知られている。そして実は、本書第二巻でハイネは、「キリスト教的・ルターの原罪とライプニッツ・ヴォルフの楽観主義は相いれない」としつつ、ドイツではこの楽観主義が壊滅され、長い間類似の慰めの学説が探し求められたが、ついに「存在するものは全て理性的である」というヘーゲルの言葉で幾らかの埋め合わせがつけられた、としている（DHA: Bd. 8/1, S. 66-67 邦訳: 81）。ここでのハイネの言葉は、上の『法の哲学』序文の言葉を変奏させたものであろう。

22) ヘーゲルは国家を重要視した哲学者であったと解釈されてきた。例えば『法の哲学』（1821年）において、ヘーゲルは、「人倫 Sittlichkeit」の最高形態は「国家 Staat」であり、国家においてのみ家族の一体性と市民社会の特殊性の間の矛盾は止揚されて、普遍的な人倫が実現されると主張した。

『ロマン派』第2巻第3章においてハイネはこうも述べている。「現在のドイツの哲学者は、権力のさびやかなお仕着せに身を包んでいる。彼らは国家哲学者 (Staatsphilosoph) になった。つまり自分たちが雇われた国家の、全ての利益を哲学的に正当化する理由を案出したのである。例えば、プロテスタントのベルリンに住むヘーゲル教授は、自分の哲学体系の中へ福音主義プロテスタントの全教義を取り込んだし、カトリックのミュンヘンに住むシェリング教授は、今その講義の中でローマ・カトリック使徒教会の最も常軌を逸した教義すら弁護しているのである」(DHA: Bd. 8/1, S. 191 邦訳: 244)。

23) 例えば A. コジェーヴは『ヘーゲル読解入門』（1947年）の中で、フランス革命

らの生存要素と見做す〔プロテスタント〕教会のために²⁴⁾ なされたのである」(DHA: Bd. 8/1, S. 113 邦訳: 135)。しかも、ヘーゲルはこのことを隠し立てせずに、自らの意図を認めていたのに対して、シェリングは、「実践的でもあり、理論的でもある絶対主義の控えの間で、芋虫のように体をくねらせたり、精神の繫鎖を造るイエズス会の洞窟でその手先として働くのだが、それでも氏は、自分が依然として昔のままの光人間 (Lichtmensch) であると、我々を瞞着するつもりでいる。……背信の恥辱にまだ虚偽の卑劣さを付け加えるわけである」(DHA: Bd. 8/1, S. 113 邦訳: 135)。

とにかく、時代はシェリングからヘーゲルに移行し、ヘーゲルがドイツ哲学を支配することになった。しかしハイネによるとそれは、ドイツの哲学革命の終焉をも意味していた。

「我々の哲学革命は終わった。ヘーゲルがその大きな環を閉じたのである。それ以降は専らこの自然哲学の学説の発展と完成を見ているに過ぎない。この学説は、既に述べたようにあらゆる学説の中に浸透し、極めて非凡なもの、壮大なものを生み出している。」(DHA: Bd. 8/1, S. 115 邦訳: 137)

この引用からは二つの問題が浮かび上がる。まず第一に、ハイネが哲学史解釈の常識に反して、ヘーゲル哲学を「自然哲学」と考えているということである。第二に、ハイネがヘーゲル哲学と、まだまともな哲学者であった頃のシェリングの自然哲学を本質的に同じもの(後者の単なる展開?)と考えているということである。順に詳しく検討しよう。

↘命とナポレオンによって実現しつつある「普遍同質国家」こそが歴史の最終到達地点であり、ナポレオンの自己意識たるヘーゲルが、ナポレオンの偉業を「概念把握」した時に、歴史は完了するとヘーゲルは考えていたと、主張した。しかし、『精神現象学』(1807年)の段階では、ヘーゲルは「プロイセン国家の讃美者」などでは全くなく、国家は克服の対象とさえ考えられていたとする解釈もある(村岡: 2012, 229-230)。ただし、コジェーヴの「普遍同質国家 l'État universel et homogène」は「世界国家であると同時に無階級社会であるような人類の共同性を意味する」という解釈もある(石崎: 2009, 342)。

24) ハイネは、本書第一巻でルターの宗教改革によって、ドイツでは(学問における)理性の自律を許したとしていた(本稿Ⅲ-1, 頁を参照)。

第一の問題については、本稿が先に確認したように、「彼〔ヘーゲル〕は自然哲学を完全な体系に作り上げ、この自然哲学の総合から現象世界全体を説明し」(DHA: Bd. 8/1, S. 113 邦訳: 134)と述べることにより、ハイネが、ヘーゲル哲学を「自然哲学の完全な体系」の創造者と考えていたことを考え併せると、ハイネは、ヘーゲル哲学を「自然哲学の完成形」として捉えていたということは疑う余地はない。

第二の問題については、上記引用中の「ヘーゲルが〔ドイツの哲学革命の〕その大きな環を閉じた」という表現と、本稿が先に確認した、ドイツ哲学の発展は、カント、フィヒテを経てシェリングの自然哲学=スピノザの汎神論に辿り着いた時に「一つの大きな循環運動を完了した」(DHA: Bd. 8/1, S. 111 邦訳: 132)とというハイネの言明を考え併せると、ハイネが、「まだまともな」哲学者であった頃のシェリングの自然哲学=スピノザの汎神論とヘーゲルの哲学を本質的に同じものと考えていた²⁵⁾のは間違いないであろう。

第一の問題と第二の問題を考え併せると、ハイネ独特の哲学史観では、カン

25) 「自然の無力 Ohnmacht der Natur」を主張し、自然自体の進化や進展の力を認めないヘーゲルの「自然哲学」(本稿注19参照)と、「無機的であるとする有機的である」とを問わず、自然全体の進行を司る根本原理」としての「進展 Evolution」を、自然に認めるシェリングの自然哲学は本質的にかなり異なるものである(松山: 2008, 491-498)。

「自然は見える精神であり、精神は見えざる自然である。それゆえ我々の内なる精神を、我々の外なる自然との絶対的同一性において、我々の外なる自然がいかにして可能であるか、という問題が解決されなければならない」(『自然哲学考案序論』)という、シェリングの有名な言葉にも見られるように、彼は自然を、主観であると同時に客観でもあるような全体として捉え、このような主観と客観の純粹な同一性がそこにおいて成立している無制約者(絶対者)から自然哲学を開始する。シェリングによると、この無制約者(絶対者)は、存在そのものであり、「産出する自然」(スピノザの「能産的自然」)である。よって「自然とは根源的にただ産出性であり、自然の原理たるこの産出性から学問は出発しなければならない」。そしてこの自然の自己産出的活動性は、より高次の次元を目指して、ポテンツ(勢位)を高めつつ進んでいく漸進的な「進展 Evolution」の過程である、とシェリングは考えている(河村: 2006, 65-66)。

以上から、ハイネのように、シェリングの自然哲学とヘーゲルの哲学を本質的に同じものと考えerるのには無理が在る。

ト、フィヒテ、シェリングへと発展してきたドイツ観念論による哲学革命は、シェリングの自然哲学＝スピノザの汎神論によって実質的には終焉を迎えており、それに続くヘーゲルはこの自然哲学＝汎神論を展開・発展させ完成に導いたにすぎない²⁶⁾ということになろう。

ドイツ哲学の革命性

本書を閉じるにあたり、ハイネはこれまでに論じてきたドイツの精神史を振り返りつつ、宗教革命から哲学革命への発展の後に、後者を基盤としてドイツには、政治革命が起こるだろうと预言している。

「ドイツ哲学は人類に関わる重大な問題であって、我々がまず哲学を仕上げ、次いで革命の仕事に向かったということでは非難されるか、称賛されるかは、後の子孫の決定しうることであろう。私が思うに、ドイツ人のように方法を重んじる民族は宗教改革から始めなければならず、その後初めて哲学に取り組むことが出来、そうして哲学〔革命〕を完成させた後によく政治革命への移行が許されたのである。この順序は全く理性的だと私は見ている」(DHA: Bd. 8/1, S. 117 邦訳: 139)。

26) カントから、フィヒテ、シェリングを経てヘーゲルに至るというのが通常のドイツ観念論の発展史(1821)の見方である。しかし厳密な見方をしたら事情はそう簡単で単線的はないようだ。『精神現象学』(1807)、『エンチクロペディー(その第二部が『自然哲学])』(1817)、『法の哲学』(1821)といったヘーゲルの主要著作の刊行後も、ヘーゲルを意識しつつ、シェリング哲学自身の発展は密かにだか続いており、『世界時間論』の膨大な草稿が書き続けられていた。また1831年のヘーゲルの死の後にも、1841-1842年のシェリングの講義が『ついに顕となった啓示の積極哲学』(1834年)として——本人の意思に反してではあるが——出版されている。本稿が今問題にしている自然哲学に関して言えば、1827年のミュンヘン大学での『近世哲学史講義』でシェリングは、ヘーゲルの自然概念を批判している(ザントキューラー: 119)。村岡晋一は、『精神現象学』(1807)でヘーゲルに批判されて以降(著作で言えば1809年の『人間的自由の本質』以降)のシェリングを「20世紀になってドイツ観念論に代表される西洋哲学の既成の枠組みを乗り越えようとする〔ハイデガー、ブロッホ、ローゼンツヴァイク等の〕思想家たちによって注目されるようになった「ドイツ観念論以後のシェリング」だとしている(村岡: 2012, 125-127, 145)。

ドイツ哲学は「社会革命」を生みだす力を秘めている。ドイツでは、革命諸勢力が、カントの批判哲学、フィヒテの先験的観念論、そしてシェリングが創りヘーゲルが完成させた自然哲学²⁷⁾のドクトリンによって発展してきているとハイネは言う（DHA: Bd. 8/1, S. 117 邦訳: 139）。ここでハイネが言う「ドクトリン」とは各々の哲学者の——決して政治哲学的理論のことではなく——あくまで純粋な哲学理論・原理論のことである。そしてここにこそハイネ独特の哲学史の見方が在る。

まず、カント主義者は、「現象世界においてもいかなる畏敬の念も持とうとせず、情け容赦なく、剣と斧で我々のヨーロッパ生活の地盤を掘り返し、過去の最後の根っこまでも絶滅させるだろう」。武装したフィヒテ主義者は、精神の中に生きており、物質に反抗しているから、地上の責め苦そのものも単なる仮象と見なし、「自らの意志を熱狂的に信じ、恐怖によっても私利によってもゆめゆめ抑制されることはない」。彼らには「危険そのものが現実によく存在しないため、いかなる危険にも勇気いっぱい立ち向かっていく」。しかし最も恐ろしいのは「行動によってドイツ革命に介入し、自らを革命の破壊作業そのものと一致させる」自然哲学者であると、ハイネは言う（DHA: Bd. 8/1, S. 117-118 邦訳: 139-140）。

自然哲学者が最も恐ろしい理由をハイネは、キリスト教ですら決して打ち砕くことの出来なかった古代ドイツ人の好戦心に求めている。

「彼ら（自然哲学者）は自然の根源的な諸力と同盟を結び、古代ゲルマン汎神

27) ハイネは、本書の最後の方で、ドイツの自然哲学（汎神論）には革命的な側面だけでなく、封建主義的で有害な側面もあると指摘している。それは、「自然哲学の諸原理」から（自然の構成や要素をモデルにして）、中世の反啓蒙主義や封建的身分制の徹底化を主張するような「自然哲学」者によってもたらされたものであった（DHA: Bd. 8/1, S. 116 邦訳: 138-139）。ハイネはフランス人たちに向けてこう言っている。「君たちがもし四年前に、ドイツの自然哲学〔このようなネガティブな面〕に精通していたら、決して七月革命〔1830年〕を起すことは出来なかったろう。……正当性だのカトリック的廷身説だのを、あらゆる所で代弁しえた右の種々の哲学的倒錯は、君たちの熱狂を鈍らし、勇気を麻痺させたことだろう」（DHA: Bd. 8/1, S. 116 邦訳: 138）。

論の魔神的な勢力を呼び出すことができ、かくして我々が古代ドイツ人に見出すあの好戦心、破壊するために戦うのではなく、また勝利するために戦うのではなく、ただ戦うためにのみ戦うあの好戦心 (Kampflust) が彼らの内に目覚めてくるからだ」(DHA: Bd. 8/1, S. 118 邦訳: 140) と述べている。

こうしてハイネは、ドイツで、哲学革命を母胎として起こるはずの政治革命を理論的に予言するだけでなく、それに期待もしている。

「私の忠告を、カント主義者、フィヒテ主義者、自然哲学者に気をつけろと警告する、この夢想家の忠告を笑わないで欲しい。精神の領域で起こったのと同じ革命を、現象の国にも期待しているこの空想家を笑わないで欲しい。稲妻が雷に先立つように、思想は行為に先立つ。……それは必ずやってくる。いつの日か君たち〔フランス人〕が、世界史上一度も響き渡ったこともないような轟音を聞いたならば、ドイツの雷がついに目標に到達したのだと知るがよい。……やがて上演されるドイツでの芝居に比べると、フランス革命など無邪気な牧歌に過ぎぬかに思えるだろう。」(DHA: Bd. 8/1, S. 118-119 邦訳: 141)

これに続く箇所ではハイネは、当初から本書の読者として想定されていたフランス人達に、この「忠告」の具体的内容を示している。それは、これからドイツで起こるだろう政治革命がいかに前代未聞の物凄いものであろうとも、決して「火を煽り立てたり、消し止めようとしなくて」、ただただ用心深く静観して欲しいというものである。ドイツ人の半分はフランス人に敵意を持っていることを忘れず、革命の「自由に陶醉し高揚した気分」の中で、この敵意が実際に行動にならぬように、恐れ、「武装して身構えて」いて欲しいというものがある (DHA: Bd. 8/1, S. 118-119 邦訳: 141-142)。

(つづく)

〈文献表〉

1. 底本にはいわゆるデュッセルドルフ版ハイネ全集を用い、DHAと略記した。
Heinrich Heine: Sämtliche Werke. Düsseldorfer Heine-Ausgabe. Hrsg. von Manfred Windfuhr. Bd. 1-16. Hoffmann und Campe, Hamburg 1973-1997.

なお訳出に際しては、既訳の在るものについては、一部表現を変えた箇所もあるが、基本的に既訳に従った。

2. 本書文中の下線（傍線）による強調，〔 〕による挿入は全て、著者河村による。
- Fichte, J. G., 1794, *Grundlage der gesammten Wissenschaftslehre: als Handschrift für seine Zuhörer*, GA 1/2 (GA=J. G. Fichte-Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, Hergsg. von Reinhard Lauth und Hans Gliwitzky, Friedrich Frommann Verlag [バイエルン科学アカデミー版], 1961-) : 『全知識学の基礎 聴講者のための手稿』(フィヒテ全集第4巻), 隈元忠敬訳, 哲書房, 1997年.
- 1797, *Zweite Einleitung in die Wissenschaftslehre, für Leser, die schon ein philosophisches System haben*, GA1/4 : 『知識学への第二序論 すでに哲学体系をもつ読者のために』(フィヒテ全集第7巻), 鈴木琢真訳, 哲書房, 1999年.
- Fichte-Schelling Briefwechsel. Einleitung von Walter Schulz*, Suhrkamp, 1968 : 『フィヒテ—シェリング往復書簡』, 座小田・後藤訳, 法政大学出版局, 1990年.
- Freud, S., 1905, *Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten*, Gesammelte Werke (Bd. 6), Fischer Taschenbuch Verlag, 1999 : 『機知—その無意識との関係』中岡成文・太寿堂真・多賀健太郎訳, フロイト全集第8巻, 岩波書店, 2008年.
- 1910, *Eine Kindheitserinnerung des Leonardo da Vinci*. Gesammelte Werke (Bd. 8), Fischer Taschenbuch Verlag, 1999 : 『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期の思い出』甲田純生・高田珠樹訳, フロイト全集第11巻, 岩波書店, 2009年.
- 1927, *Die Zukunft Einer Illusion*, Werke (Bd. 14), Fischer Taschenbuch Verlag, 1999 : 『幻想の未来』中山元訳, 光文社古典新訳文庫, 光文社, 2007年.
- Hegel, G. W. F., 1807, 1970, *Phänomenologie des Geistes*, Suhrkamp Verlag : 『精神現象学』(世界の大思想 第12巻), 榎山欽四郎訳, 河出書房新社, 1969年.
- 1817, 1970, *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften III*, Suhrkamp Verlag.
- 1821, 1971, *Grundlinien der Philosophie des Rechts*, Suhrkamp Verlag : 『法の哲学』(世界の名著 第35巻), 藤野渉・赤澤正敏訳, 中央公論社, 1967年.
- Heine, H., 1835, *Die romantische Schule* (DHA : Bd 8/1) : 久山秀貞訳『ロマン派』, 所収 木庭宏責任編集『ハイネ散文作品集』第4巻(文学・宗教・哲学論), 松籟社, 1994年.
- 1835, *Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland* (DHA : Bd 8/1) : 森良文訳『ドイツの宗教と哲学の歴史によせて』, 所収 木庭宏責任編集『ハイネ散文作品集』第4巻(文学・宗教・哲学論), 松籟社, 1994年.

- 1854, *Gestänntnisse* (DHA: Bd15): 高地久隆訳『告白』, 所収 木庭宏責任編集『ハイネ散文作品集』第3巻(回想記), 松籟社, 1992年.
- Mack, M., 2010, *Spinoza and the Specters of Modernity: The Hidden Enlightenment of Diversity from Spinoza to Freud*, Continuum.
- Kojève, A., 1947, 1980, *Introduction à la lecture de Hegel: leçons sur la Phénoménologie de l'Esprit professées de 1933 à 1939 à l'École des Hautes Études*, Gallimard: 上妻 精・今野雅方訳『ヘーゲル読解入門——『精神現象学』を読む』, 国文社, 1987年.
- Schelling, F. W. J., 1797, *Ideen zu einer Philosophie der Natur*, SW/II (SW=F. W. J. Schelling, Sämtliche Werke. Hrsg von K. F. A. Schelling, 14Bde. Stuttgart und Augsburg 1856-1861 [いわゆる SW 版=息子編全集版]): 『自然哲学に関する考案』(シェリング著作集 第1b巻), 松山壽一訳, 燈影社, 2011年.
- 1798, *Von der Weltseele, eine Hypothese der höhern Physik zur Erklärung des allgemeinen Organismus*, SW/II: 『宇宙霊について——普遍的有機体解明のための高等自然学の一仮説』(シェリング著作集 第1b巻), 松山壽一訳, 燈影社, 2011年.
- 1801, *Darstellung meines Systems der Philosophie*, SW/IV: 『私の哲学体系の叙述』(シェリング著作集 第3巻), 北澤恒人訳, 燈影社, 2006年.
- 1804, *Philosophie und Religion*, SW/VI: 『哲学と宗教』(シェリング著作集 第4a巻), 藪田坦訳, 燈影社, 2011年.
- 1809, *Die Philosophischen Untersuchungen über das Wesen der menschlichen Freiheit und die damit zusammenhängenden Gegenstände*, SW/VII: 『人間的自由の本質とそれに関連する諸対象についての哲学的探求』(シェリング著作集 第4a巻), 藤田正勝, 燈影社, 2011年.
- Thielicke, H., 1989, *Goethe und das Christentum*, Piper Verlag GmbH: 『ゲーテとキリスト教』, 田中義充訳, 文芸社, 2003年.
- Yovel, Y., *Spinoza and Other Heretics* (vol. 2), Princeton University Press: 『スピノザ異端の系譜』, 小岸昭・E. ヨリッセン・細見和之訳, 人文書院, 1998.
- 荒井保治「ハインリッヒ・ハイネの初期抒情詩(Ⅲ)——『ハルツの旅から』『北海』の展開と『歌の本』の構成意図——」五十四頁
- 石崎嘉彦, 2009, 『倫理学としての政治哲学—ひとつのレオ・シュトラウス政治哲学論』, ナカニシヤ出版.
- 井上正蔵, 1992, 『ハイネ序説』〔新装版〕版, 未来社.
- 一条正雄, 1970, 「ハイネのヘーゲル像をめぐって: Heine und sein Hegel-Bild」, 岐阜大学教養部研究報告 vol. [6] p. [35]-[48]
- 1974, 「ハイネにおける思想的展開」, 岐阜大学教養部研究報告 vol. [10] p.

[24]-[33]

- 1997, 『ハイネ』(Century Books——人と思想) 清水書院。
入江幸男, 2001, ドイツ観念論の実践哲学研究, 弘文堂。
可知正孝, 2011, 『詩人ハイネ 作品論考と他作家との対比』
H・J・ザントキューラー編, 2006, 『シェリング哲学—入門と研究の手引き』(松山
寿一監訳), 昭和堂。
高山守, 1996, 『シェリング—ポスト「私」の哲学—』, 理想社。
柘植尚則編著, 2006, 『西洋哲学史入門——6つの主題——』, 梓出版社。
中井真之, 2010, 『ゲーテ『親和力』における「倫理的なもの」——F・H・ヤコービ
の「スピノザ主義」批判との関連において』, 鳥影社, 2010。
長島隆, 2004, 「知的直観——カントとスピノザの交差, あるいは自然哲学の基礎
——」, 『理想』第674号(特集「シェリング没後150年」), 理想社。
平尾昌宏, 2004, 「形式・体系・自然——シェリング『叙述』とスピノザ『エチカ』」
所収松山壽一・加國尚志編『シェリング自然哲学への誘い』晃洋書房。
松山壽一, 2007, 「スピノザとシェリング——受容から離反へ」, 『スピノザーナ』第
8号, スピノザ協会。
———2008「ドイツ自然哲学」所収『哲学の歴史』第七巻, 中央公論新社。
松井利夫, 1996, 「革命詩人ハインリヒ・ハイネの告白」
峰島旭雄編著, 1989, 『概説西洋哲学史』, ミネルヴァ書房。
村岡晋一, 2012, 『ドイツ観念論 カント・フィヒテ・シェリング・ヘーゲル』(講談
社選書メチエ), 講談社。
舟木重信, 1965, 『詩人ハイネ 生活と作品』, 筑摩書房。
※ハイネ『北海』第三部の邦訳
石中象治訳(1932), 所収:『北海・観想』(世界名作文庫222), 春陽堂, 1932。
舟木重信・中村英雄訳(1948), 所収:『ハルツ紀行 北海 ル・グランの書』(ハイ
ネ選集第七巻), 解放社, 1948。
角信雄訳(1949), 所収:『北海・随筆』, 白水社, 1949。
中村英雄訳(1964) 所収:『ハイネ』(世界文学大系78), 筑摩書房, 1964。